

社会圏と心の変化

異質結合をすることで、考え方に変化は起こるのか

12992050 奥村雅彰

立木茂雄教授

目次

序論

1 社会圏

1.1 社会圏

1.2 集団と個人の関係

1.3 社会圏のまとめ

2 パーソナル・ネットワーク

2.1 日本のパーソナル・ネットワークの特徴

2.2 属性とパーソナル・ネットワーク

2.3 都市化とパーソナル・ネットワークの関係

2.4 ネットワークの異質性と脱通念度

2.5 都市化はネットワークの同質性を高めるのか否か

2.6 パーソナル・ネットワークの普遍的特長

3 調査

3.1 仮説

3.2 問6について

3.3 問14(4)とのクロス表

3.4 問2(2)とのクロス表

3.5 問2(3)とのクロス表

3.6 調査のまとめ

4 結論

4.1 まとめ

4.2 最後に

序論

私には、複数の友人がいる。それはサークルにおいての友人であったり、ゼミの友人、高校時代の友人、中学以前からの友人であったりと、さまざまな場面において出会った友人である。こうした友人たちと関わっているうちに、私はあるひとつの考えを持つようになった。それは「さまざまな考えを持つ友人たちと触れ合うことによって、自分自身の考え方も変わってくるのではないか」という考えである。つまり、自分にはない考え方をする人間と話をすることによって、自分自身に新しい考え方が芽生え、そういったことを繰り返すうちに、自分がはじめに持っていた考え方や価値観がどんどん変化していくのではないか、ということである。そして、自分について考えてみると「今こういう考え方の友人が周囲に多くいるから、私も今こういう考えをしているのかな」と人の考えに影響を受けている自分を発見することができた。この、私が気付いた考えがもしも正しいのであれば、とにかく友人だけに限らず自分の考え方とは違う考え方を持った人と話すことで、自分の考え方や価値観がどんどん変わっていく、また変えていくことができる、ということになる。

この、私の疑問を解決したいという思いから、私は「自分と違う考え方をする人たちと多く関わることによって、自分の考えが変わるのではないか」を卒業論文のテーマにしようと思ったのである。つまり、かたい言い方をすると「異質結合をすることで、自分の考え方に変化は起こるのか」である。

それでは、この卒業論文の構成について述べていきたい。大まかな流れとしては、先行研究の提示、データを使った調査、まとめ、という流れである。

まずはじめに、先行研究としてゲオルグ・ジンメルGeorg Simmelの社会圏についての議論をあげている。ジンメルは個人が自分と異質な圏と交わることによって、その個人の心というものはどんどん分化していく、という意見をもち、異質結合することを奨励する立場で議論を進めている。そして、心が分化していくにつれ、自分とは違う相手の考えを理解することができるようになり、また相手との間の共通な上位概念をも理解することができるようになる、というのである。

次に、大谷信介が議論している、パーソナル・ネットワーク（個人の社会圏）についての先行研究を挙げている。大谷は日本と北米のパーソナル・ネットワークを比較することで日本のパーソナル・ネットワークの特徴を探り出している。そこでは、特に日本の「近隣ネットワーク」について深く取り上げた。それは第 3 章において「近所づきあい」を中

心にデータ分析をしていくからである。また都市化とパーソナル・ネットワークの関係についてもとりあげている。そこでは、大都市特有の人間関係の傾向を取り上げた。そして、ネットワークの異質性と脱通念度とのかかわりを大谷が調査しているので、これについてもとりあげた。

以上の先行研究の提示によって、私の「自分と違う考え方をする人たちと多く関わることによって、自分の考えが変わるのではないか」というテーマがやはり正しい、ということが示された。そして次は自分なりにデータを扱い、私のこのテーマ通りの結果が得られるか、を調査している。

最後には、実証することのできた結果を踏まえてまとめをおこなっている。

以上が私の卒業論文の構成である。

1 社会圏

まず、ジンメルが「社会分化論」において「社会圏」について議論しているのです、これをみていこうと思う。

1.1 社会圏

社会圏とは、個人が属している「圏」のことである。それは例えば職業であったり、国民であったり、身分であったり、家族、大学、サークル、ゼミ、アルバイト、地域といったものである。ちなみにその圏を構成している人数の、多い少ないは関係ない。そしてゲオルグ・ジンメルはこの圏について「個人の属しているさまざまな圏の数は、文化の程度をはかる尺度のひとつである」(ジンメル 1890=1970: 121)と述べている。またジンメルは「そのうちの多数はなるほど対等ではあるが、しかし他の諸集団は、そのひとつがより根源的な結合としてあらわれるように配列されている」(ジンメル 1890=1970: 121)と続けている。つまり、この個人が属している個々の圏というものは対等なものであるが、何かひとつを中心的な圏としてほかの圏が組み合わされている、ということである。現代の人間であれば「自分の家族」を中心としながらも「会社」に勤務し、「共通の趣味を持つ友人」とかかわり、また「親戚」とつきあいといった感じである。この結果ジンメルは「個人の属している諸集団は、いわばひとつの座標系を形成し、そこで新しくつけ加わるそれぞれの集団が、個人をさらにますます正確かつ一義的に規定することとなる」(ジンメル 1890=1970: 122)と述べている。これはなぜなら、他人とまったく同じ社会圏の組み合わせをもつ、ということはあるからである。つまり、「自分らしさ」は自分が所属する社会圏の数や量、そしてその内容によって規定されているのである。

また、このことはジンメルによると「人格と人格の属している圏との関係についても事情はまったく同じである」(ジンメル 1890=1970: 122)というのである。

ジンメルはこう述べている。

人格は、その起源においては、やはりまた無数の社会的な系の交差点に過ぎないのであり、さまざまな圏と適応の時期からえた遺伝の結果にほかならない。そして人格が個性となるのは、種族の要素がどんな量と組合せで人格のなかでいっしょになるかという、その量と組合せの特殊性を通じてなのである。(ジンメル 1890=1970: 123)

ところで、ジンメルは「人格の規定性は、規定する圏が集中しているよりもむしろ並存しているばあいのほうがそれだけより大きくなるであろう」(ジンメル 1890=1970: 123) といっている。つまり、「個性化の可能性は、同じ人間が同時に所属しているさまざまな圏のなかで、まったく異なった相対的な地位を占めることができるということによっても、また無限にまで増大するものである」(ジンメル 1890=1970: 123) ということである。

このことについてジンメルはいくつかの例をあげている。一つ目は、国民皆兵義務のある国においては、精神的・社会的に最高地位の者でも軍兵期間は下士官に服従しなければならない。これは、その者のなかで最高地位に属しながらも下士官よりも低い地位である、という相異なる地位を占めている例である。次に、パリの乞食組合においては「乞食の中の王」というものが存在している。これも同様に、相異なる地位を所有する例である。また、集団内部での相反する地位を占めている例として、商人があげられる。商人は一方では商業界の維持と発展のために他の商人達と結合して圏をなす。しかし、他方では同業の商人に対して競争的な対立関係に陥る。つまり、同じ利益のためにもっとも緊密に結合しなければならない者ともっとも激しく競争する、という相反する立場を持つのである(ジンメル 1890=1970: 124)。

これらの例が、その者の人格に対してどんな意義をもつかを考えてみると、ジンメルは「個人が競争と結合の関係が大きく変化する多様な圏に所属していることによって個性化の組合せの無限の可能性が現れてくる」(ジンメル 1890=1970: 122) と述べている。つまり一方向からの立場だけではなくて、ある場面では自分はまったくの下っ端であるが、別の場面では人に指導する立場であるなど、いろいろな立場を持っていることが「その者の個性の発達」にとって重要である、ということである。

1.2 集団と個人の関係

ジンメルは別々の個人の意識が集団意識に発展する過程についてこう述べている。

統一的な社会的意識への総括は、個人的な特殊性をこえた高い抽象によって関心をひくものであるが、それは賃労働者そのものの共属性のなかにも見出される。個人をつくるものが大砲であれ玩具であれ、それとはかかわりなく彼が一般に賃金のために労働しているという形式的な事実が、彼を同じ状態にある者たちといっしょに結合させる。すなわち、資本にたいする同じ関係がいわば指数となり、これによってきわめ

てさまざまな種類の活動にみられる同種のものが分化してとりだされ、これに参与するものすべてのものたちのための統一化が生じるのである。(ジンメル 1890=1970: 129)

つまりこの例の場合、たずさわっている仕事は何であれ労働者はすべて「賃金のために労働している」のであるから、それが皆の共通意識となって労働者同士が団結する、つまり新しい社会圏が生まれる、ということである。また、ジンメルによると、これと類似の結合によって実際の集合主義的な制度、商人層といったものがつくられるのである(ジンメル 1890=1970: 130)。

そして、ジンメルは「分業がまだそれほど進んでおらず、類似の課題のすべてが同じ個人なり職業圏なりによって果たされ、したがって、ごくわずかな課題だけしか存在しないかぎりには、多くの結果をともなう心理的な融合が、ややもすれば二つの方面へ向かって成り立つ」(ジンメル 1890=1970: 130)という。

それは第一に、「より個別的な圏から、以前はただ潜在的に存在していたにすぎない上位の圏を分岐させるばあい」(ジンメル 1890=1970: 131)である。ジンメルの例を出してみると、婦人たちは多数で団結して政治的な権利や社会的な権利をかちとろうとしたりするが、実際には行動には移らない。なぜならば、婦人たちの考え方や行動が、一般的にはあまりにも似ているので、実際的な内容にみたされた一般概念は、生じることができないからである(ジンメル 1890=1970: 130)。

つまり、ジンメルが「ただ一種類の木だけが存在するのであれば、木一般という概念も構成されるようにはならなかったであろう」(ジンメル 1890=1970: 131)と付け加えているように、複数の、色も形も違う木が多数あるときにはじめて、それらをまとめる「木一般」という概念が生まれるのである。

またジンメルが「しっかりと分化し教養と活動とが多方面にわたるひとびとのほうが、一面的な性質をもつ者よりも、はるかに世界市民的な感覚と確信への傾向をもつものである」(ジンメル 1890=1970: 131)といているように、先ほどのことは人間についても同じことがいえるのである。つまり、心が分化しておらず、常に同じことのみを繰り返して、物事を一方面からしか見ることができない者よりも、いろいろな世界に足を踏み入れ、自由な考え方をすることができる者のほうが、よりすべてを見渡すことができる位置にいる、ということである。さまざまな立場に立って、「違い」を経験し理解している者は、他の人

格に立ち入ってそれを理解することができ、したがってまた、すべてに共通なものを感じ取ることができる、ということである。

第二に、「同位にある圏を互いに分離させるばあい」(ジンメル 1890=1970: 131)である。

これについてジンメルはこう述べている。

人間の多様な生活内容は、あるひとつの関心圏から方向を定められるものであるから、すべての人間においてこの関心圏は、その範囲を縮小するにつれその力を減少するのである。この意識の狭さによって、多岐にわたる仕事やこの仕事に属する多様な表象が、また他の表象界をも自らの支配化に引き入れるといったことが生じるのである。(ジンメル 1890=1970: 132)

つまり、自分をはじめから持っている関心圏(既存の考え)が限定的であればあるほど、その考えの中に、関係のない別の事象をも無理に引っ張りこんで理解しようとするのである。

また、ジンメルはこう続けている。

まだ分業化されていない仕事のばあい、表象が比較的すみやかに交代しなければならないという必要によって、大量の心理的なエネルギーが浪費される。そのために他の諸関心の開発がそこで妨げられて、今やそのように弱められた関心は、それだけますます連想的にかあるいはそのほかの仕方で、右のような中心的な表象圏に依存するようになるのである。(ジンメル 1890=1970: 132)

よって、ジンメルは「なお分業化していない仕事のほうが、きわめて専門化した仕事よりも人間の生活過程においては、他のすべてのものを吸収する中心的な地位を占めやすくなる」(ジンメル 1890=1970: 132)といている。つまりこれを心の場合に置き換えるなら、心が分化していないがゆえに心の中心圏から他の関心圏に考えをスライドさせるのが億劫になるので、先ほど述べたように自分が持つ既存の考えの中に新しい事象を無理に引っ張りこんで理解しようとするのである。よって心が分化していない場合、その心は他の

考え方すべてを吸収する一つの中心的な役割を持つ、ということである。逆にいえば、その心の中心圏しか他の考え方を吸収することができない、ということである。

また、ジンメルはこう述べている。

仕事が一面的で、また機械的であるために、それ以外の他の諸関係のほう意識のなかでより多くの余地を占めるようになると、その程度に応じて、その諸関係の価値と自立性もまた増大するに違いない。以前はひとつの中心的な関心に融合していた諸関心が、このように同意的に並列しながら分離することは、さらに分業のいまひとつの結果によってもまた促進されるのである。(ジンメル 1890=1970: 133)

これはつまり、既存の考え(中心的な圏)に属していたある考えの価値が増大するにつれ、その考えが分離していくという、分化の過程の説明である。

そしてジンメルはこう続ける。

職業への帰属ということが、その他の生活関心とその職業に依存させるとすれば、この依存関係は職業部門の増加につれて弛緩するにちがいない。なぜならば、その他のすべての関心でのさまざまな同等性は、職業部門の相違にもかかわらず、おそらく明白となるだろうからである。これは心の生活のきわめて繊細な関係においても同じであり、道徳的に必要な行為や感情が、他人にあってはわれわれのばあいとまったく別な前提に依存しているのを知れば、われわれは多くの内のおよび外的な自由を獲得するのである。(ジンメル 1890=1970: 133)。

つまり心の場合にも、相手の感情の出所がどこであれ、自分の心がしっかりと分化し、相手との共通な感情を理解することができれば、われわれはもっと考え方において自由になることができる、ということである。

1.3 社会圏のまとめ

このように分化によって向かうのは二つの方向があるが、行き着くところは「相手との

共通な部分を見ることが重要」というところである。

ジンメル意見をまとめると、多くの社会圏に所属し、さまざまな立場を持つことでよりその者の個性が発達する、つまり心が分化していく。そして心が分化することによって相手との違いを理解することができ、共通な部分を見ることが出来る。そして、より心の幅が広がって、心が豊かになれるということである。

これは私の「自分と違う考え方をする人たちと多く関わることによって、自分の考え方が変わるのではないか」という仮説と同じ考え方である。まず、多くの社会圏に所属する、ということは当然自分の考え方とは違う、異質な者たちの社会圏に所属する確率も必然的に高くなるだろうからである。それは、自分と正反対の考え方をする、まったく異質な社会圏であっても良いし、自分の考え方と少し違うだけの異質な社会圏でも良い。そして、自分と同じ考え方をする者たちとのみ関わり過ぎしていくよりも、多くの自分と異質な者と過ごすほうが、新しい考え方にもより多く出会え、今までの自分にはなかった新しい立場を持つことになる。つまり、それまでの自分とは違う、新しい考え方を持つようになる、ということである。

これを例として示してみると、まず、プロ野球の選手とプロサッカーの選手が触れ合う機会があったとする。それぞれはその道でプロとして仰がれている人である。しかしそれぞれが相手のスポーツの話をするとなれば、一転して初心者になってしまう。同じスポーツという分野なのに、自分の得意分野においてはそれでお金を稼ぐほどの者であるが、不得意分野になると初心者と位置付けられてしまう、というまったく相反する立場を獲得することとなる。こういったことを繰り返して新しい立場を多数持つにつれて、心が分化していき、相手との共通な上位概念を発見し、理解することができるようになるのである。今の例における共通な上位概念とは、お互い活躍している場所は違えど友にスポーツ界の繁栄を願っているという点である。こうして相手を理解して、自分の考えも変わり、どんどん心が豊かになっていくのである。

2 パーソナル・ネットワーク

第 1 章においては社会圏について取り上げ、私の卒論テーマである仮説が正しいことが証明された。ここからは、現代の個人の社会圏、パーソナル・ネットワークについての先行研究をとりあげてみる。それでは、大谷信介が「現代都市住民のパーソナル・ネットワーク」においてパーソナル・ネットワークに関する議論をしているので、これをみていく。

2.1 日本のパーソナル・ネットワークの特徴

まずはじめに、大谷が日本のパーソナル・ネットワークと北米のそれとを比較することにより日本のパーソナル・ネットワークの特徴を探りだしているのので、それをみていこうと思う。

大谷が示す日本のパーソナル・ネットワークの特徴の 1 つ目は、日本の親族ネットワークは北米のそれより弱いということである。2 つ目は、日本において親戚の中でも兄弟を最も親しい人として挙げる人の比率が北米社会より高いということである。3 つ目は、日本の職場ネットワークは北米より強いということである。4 つ目は、日本の近隣ネットワークが北米社会よりも強いということである。以上 4 つが日本のパーソナル・ネットワークの特徴である（大谷 1995: 125）。

ここで、4 つ目の特徴である「近隣ネットワーク」は、第三章の「調査」の部分で重要となるので、もう少し詳しくみていきたい。

まず、この「日本の近隣ネットワークが北米社会よりも強い」という結果は、日本と北米の比較分析によってでた、「日本の方が、北米よりも近所の人を最も親しい人と指名する比率が高く、親しくつきあっている近所の人々の平均人数も日本のほうが多い」（大谷 1995: 116）という結果に基づくものである。大谷によるとこの違いの原因は、アメリカ社会と日本社会との間には近隣関係をめぐる客観的諸状況の大きな違いがあるから、である。そこで、大谷が示しているその違いをみていこうと思う。

まず、近隣関係の歴史的文化的背景の違いである。日本においては昔から、「向こう三軒両隣」という言葉に象徴されるような、一種義務的な隣近所づきあいが受け継がれてきた。また、全員加入を原則とする町内会の活動なども、日本の近隣ネットワークを強くしている原因である。

次に、近隣関係に関連する、居住年数や住居移動の状況の違いである。GSS 調査と中四国調査のデータを比較してみると、現住市への平均居住年数でアメリカ 20.4 年、日本 31.8

年と平均で 10 年近くの差が存在しているなど、明らかに日本人のほうが平均居住年数が長い。

そしてセグレーション（空間的凝離）の存在である。多民族社会かつ移民社会である北米社会では、人種・民族・国籍・社会経済的地位・趣味・嗜好に応じて諸個人のセグレーションが数多く発生しているのである。しかし、単一民族に近い日本ではこうした空間的なセグレーションは明確にはほとんど存在していないといえる。このセグレーションがアメリカの住居移動の頻繁さの原因ともいえるので、近隣関係の質的内容に大きな影響を与えていると考えられる。

最後に、住民のコミュニティに対する意識の違いである。これはつまり、住民の居住地への愛着意識の差である。アメリカ人にとって居住地への愛着は、近隣関係や友人との関係といった、そこで営まれるネットワークによって決定される要素が強いのにに対し、日本人は出身地や土地に執着が強いという差である。

大谷は日本と北米における近隣ネットワークの差の原因を以上の 4 つに分類している(大谷 1995: 116-8)。

よって、先ほどの「日本の近隣ネットワークが北米のそれよりも強い」という結果についてこれらからいえることは、日本においては昔から「生まれ育った土地」というものを大事にし、そして同時にそれに縛られてきたのに対して、アメリカにおいては「生まれ育った場所」ではなくて、自分が選択して住んだ場所、そしてその場所における隣人との関わりを重視してきた、という違いに起因する結果なのではないかということである。

2.2 属性とパーソナル・ネットワーク

次に大谷は、どのような属性の人がどのようなパーソナル・ネットワークを持つ傾向にあるのか、を分析している。

この分析の結論として大谷は、人づきあいの多さ（ネットワーク規模）を規定している属性的要素としては次の 2 つの要素が重要である、としている。それはまず、人と接触する機会の多い、または多かった人、という要素である。例えば、労務職よりも営業職の人のほうが、また学歴でいえば、大卒者は中卒者に比べると高校・大学時代の友人ができるので中卒者より人と接触する機会が多い、といったかんじである。次に、人と接触するのに制約が少ない人、という要素である。例えば、子持ちの主婦であったなら、人と付き合いたいと思ったとしても子供の世話など制約が多いため、思うように交友関係を結ぶこと

ができない、と考えられるからである（大谷 1995: 132）。

2.3 都市化とパーソナル・ネットワークの関係

そして大谷は都市化とパーソナル・ネットワークの関係についてみている。ここで大谷は「都市化」という言葉を単に人口が増えるという意味だけでなく、「異質な人が多数存在する空間になっていく」という意味で使っている。つまり、同質な人が多く存在する農村社会から異質な人が多く存在する都市社会になるにつれ、人と人とのつきあい方はどう変化していくのか、を考察しているのである。

その分析によると、都市化度の違いによって大都市の人と地方都市の人とでは、つきあっている人の総数（量）は変わらないが、そのつきあい方やスタイル（質）に差がある、ということを発見している（大谷 1995: 153）。また、その大都市における「つきあい方」について大谷は以下の3つの言葉を取り上げている。

単一送信型ネットワークと多重送信型ネットワーク

まず「単一送信型ネットワーク」とは、異なる目的に応じてそれぞれ異なる人々と関係を取り結び、交換される財が限定的であるような関係性のタイプである。これに対して「多重送信型ネットワーク」とは、同じ人とさまざまな場面で種々異なる目的をもって取り結びうるような許容性を内包する関係性のタイプである（大谷 1995: 159）。ここで大谷は「都市生活においては、個人の選択性を拡大するような単一送信型ネットワークが重要な意味を持っており、都市的ネットワークのひとつの重要な特徴であると位置付けることが可能だと考えられる」（大谷 1995: 159）と述べている。

親密な第二次的関係

親密な第二次的関係、これはワイヤーマンが提起した「都市コミュニティでしばしば観察される、親密ではあるが深入りはしない二次的な関係」のことをあらわした言葉である。この二次的な関係という表現について大谷は、深入りせずに相手との関係をやめたいときに簡単にやめられる関係を求める、都市住民の人間関係の特徴をうまく表現していると述べている（大谷 1995: 160）。

そして、都市化につれて以上3つの言葉に示されるような、「広く浅い」つきあいを望む傾向が強くなることが大谷の研究によって明らかになっている。

大谷は言及していないが、私は現在のインターネットの普及はこの3つの言葉を最もよく反映したものであると思う。今はチャットやメールなどで、まったく見知らぬ複数の相

手と情報をやり取りする時代である。そしてそれはたいてい、一人の相手と深くつきあうというよりは複数の相手との浅い情報のやり取りである。また、どちらかの事情が悪くなれば、すぐにそのつきあいを終了することができる。これこそがまさに都市的な、「単一送信型ネットワークと親密な第二次的関係」の例であるといえる。

2.4 ネットワークの異質性と脱通念度

ネットワークの同質性 異質性とアーバニズムの社会的結果である「脱通念度」とはどのような関係にあるのだろうか。このことについて大谷はネットワークの同質性と異質性が、個人の意識にどのような影響をあたえているのかという観点から考察している（大谷 1995: 190）。ここでの大谷の仮説は「“都市的特長”としての脱通念度の増大は、ネットワークの異質性すなわち個人レベルの異質結合によってもたらされるのではないか」（大谷 1995: 190）というものである。

表1 最も親しい人を 非親戚 と答えた人の出身地の異質性と意識

(%)

最も親しい人の出身	脱通念度 A	脱通念度 B	開放度	コスモポリタン度
自分と同じ市出身 (n = 198)	56.7	48.7	70.6	29.3
自分と同じ県出身 (n = 212)	61.7	51.2	71.3	23.8
異なる県出身 (n = 152)	65.1	63.9	83.6	35.1
			P<0.05	P<0.05

「出典：現代都市住民のパーソナルネットワーク（1995）」

表 1 の各項目の説明は以下である。

脱通念度 A ・ ・ 「今までのしきたりや考え方にはこだわらずに行動するほうだ」で Yes と答えた人の比率

脱通念度 B ・ ・ 「やはり “ 男は仕事、女は家庭である ”」で No と答えた人の比率

開放度 ・ ・ 「～市の職員には能力のある人であれば～市出身以外の者でもかまわない」と考える人の比率

コスモポリタン度 ・ ・ 「外交や経済政策など国政全体の問題では活躍するが地元の面倒はあまりみない政治家」と「地元の振興や国への仲介など地元の世話役

活動に専念する政治家」どちらに投票するかで、前者に投票する、
と答えた者の比率

表 1 によると、通念にとらわれない意識を持つ回答者の比率は、異質結合している人のほうが明らかに高くなっている。この、異質結合している回答者に一貫して、通念にとらわれない意識をもつ者の比率が高いという結果から大谷は、今後都市化とネットワークの関連やアーバニズムの研究を行っていく場合に、こうしたネットワークの異質性とそれが与える影響について十分な考察が必要となるだろう、と述べている（大谷 1995: 190-1）。

この大谷の調査の結果は、第 1 章で示したジンメルの理論を当てはめると納得がいく。ジンメルの理論によると、心が分化している者は相手を理解することができ、相手との間の共通の上位概念に着目することができる、というものであった。それをこの場合に置き換えると、「異質結合している回答者」は「心が分化している者」と置き換えることができる。なぜなら、「異質結合している回答者」は「同質結合している回答者」に比べて多くの社会圏に属している可能性が高いからである。多くの社会圏に属しているということは、ジンメルの理論によると心が分化している、ということである。次に「通念にとらわれない意識」は「相手との間の共通の上位概念」と置き換えることができる。目先の利益や一部の人間の利益のみを考えずに、みんながうまくやっていける方向をしっかりとみている、という意味である。ゆえに、「異質結合している回答者に一貫して、通念にとらわれない意識をもつ者の比率が高い」という結果は、ジンメルの理論と同じ結果ということになる。また、同様に私の卒業論文のテーマである「自分と違う考え方をする人たちと多く関わることによって、自分の考えが変わるのではないか」を肯定する結果ということにもなる。

2.5 都市化はネットワークの同質性を高めるのか否か

また、大谷はフィッシャーの下位文化理論をとりあげている。それはフィッシャーの下位文化理論が都市化とネットワークの関係を述べたものだからである。その下位文化理論においては、「都市化がネットワークの同質性を高める」という議論が骨格となっている。つまり都市の人口規模が高まれば、個人の選択の余地や範囲が広がるとともに制約は減少し、同質結合傾向（ホモフィリー）が促進されることによって、ネットワークの同質性が高まるという見解である（大谷 1995: 168）。

大谷はこの下位文化理論をわかりやすく示している。それは＜人間は同質結合するのが快適であり、そうすることはお互いにとって価値がある＞ ＜制約がなければ選択の結果

人間は同質結合するものである> <人口規模が高まれば、選択の余地や範囲が広がり制約は減少する> <都市化はネットワークの同質性を高める> , というものである(大谷 1995: 169) .

しかし、大谷が「都市化はネットワークの同質性を高めるのか否か」を検証したところ、都市化がネットワークの同質性を高めるというよりむしろ「都市の異質性の高さが、そのままネットワークの異質性を高める」(大谷 1995: 181)という結果を得ている。ちなみに、ジンメルが重視する「ストレンジャー(余所者)」という概念は、異質な文化的背景を持つ個人の客観性と創造性に着目した概念であり、「出身地の異なる人間との接触が重要性をもつ」という議論である。さらに、ウィリアムスやフォードらの異人間接触に関する実証研究によって示された「対等な立場で展開される異人間接触は人種的偏見を減少させている」という知見に象徴されるように、アメリカ社会でも個人レベルの異質結合が積極的意味をもっていることは実証的にも証明されている。これらをふまえて大谷は、同質結合を強調するフィッシャー理論は再検討されなければならないと考えられる、と述べている(大谷 1995: 205-7) .

2.6 パーソナル・ネットワークの普遍的特長

大谷による日米の比較で明らかになったことは3つある。まず、1つ目は「親戚づきあい」がパーソナル・ネットワークの中心的位置をしめている」ということである。2つ目は「個人の諸属性がパーソナル・ネットワークに大きな影響を与えている」ということである。3つ目は「生態学的要因(居住する都市の人口規模)がパーソナル・ネットワークの構成に大きな影響を与えている」ということである。

大谷は上記の3点は、人間がどの社会に住んでいようとも共通してみられるであろう普遍的特長を示す結果と考えられる、と述べている(大谷 1995: 211) .

3 調査

3.1 仮説

ここからは私が編集したデータを分析することで、ジンメルや大谷が述べてきたような考察がえられるかどうかをみていきたいと思う。使用させていただくデータは、「『協働と参画のまちづくり』をめざして」という、神戸市で実施された 1 万人アンケートの調査結果である。この 1 万人アンケートはよりよい神戸の街を作っていくために、まず神戸市の住民が自分たちの町についてどういう意識をもっているのかや地域とのかかわり方、そして近所とのつきあい方などを調査したものである。質問項目は全部で 15 問あるのだが私が利用させていただくのは問 2 の (2)(3)、問 6 の (1)(2)(5)、問 14 の (4) の 3 つの質問の 6 項目である。では、各項目の質問内容と回答形式をみていきたい。

問 2 (2) 地域での子供の見守りや青少年の健全育成の手助けをしている 「よくしている・たまにしている・あまりしていない・していない」のなかから 1 つを選択

問 2 (3) 自治会活動などの地域活動に参加している 「よくしている・たまにしている・あまりしていない・していない」のなかから 1 つを選択

問 6 (1) いつもあいさつをする近所の人、何人いますか 「1, 約 () 人いる・2, とくにいない」から 1 つを選択。もし 1 を選択するならば何人かを記入

問 6 (2) 立ち話をよくする近所の人、何人いますか 「1, 約 () 人いる・2, とくにいない」から 1 つを選択。もし 1 を選択するならば何人かを記入

問 6 (5) おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもらったりする近所の人、何人いますか 「1, 約 () 人いる・2, とくにいない」から 1 つを選択。もし 1 を選択するならば何人かを記入

問 14 (4) 地域のみんなが困っていることがあるとき・・・ 「1 みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う・2 誰かがうまく解決してくれると思う」からいずれかを選択

それぞれは以上のような質問内容・回答形式となっているが、大まかに 2 つのパターンに分類することができる。1 つ目は、近所づきあいの人数の多い少ないを把握する質問。つまり、問 6 の (1)(2)(5) である。2 つ目は、地域活動への積極参加傾向を把握する質問、つまり問 2 の (2)(3) と問 14 (4) である。では、なぜ私がこれらの質問項目を利用しようとするのか、を私の仮説とともにみていきたい。

まず、第一章で述べた、ジンメル（Zygmunt Bauman）の社会圏の議論についての私なりのまとめをみてもみる。それによると、人間は複数の社会圏に属することでよりその者の個性が発達し、心が分化していく。そして心の分化により相手との違いを理解でき、相手との共通な部分を見ることが出来る。つまり、心が豊かになれる、ということである。

これを個別の例で考えてみると、複数の相手と人付き合いをしている人は複数の社会圏に属しているといえる。なぜなら、人それぞれは皆が個別な考え方をする生き物なので、人と話すということは、その時点で新しい社会圏に触れている、ということになるからである。ゆえに、話す相手が1人しかいない人よりも話す相手が20人いる人のほうが多くの社会圏に触れているので、より心も分化しているといえる。その結果、話す相手が20人いる人のほうが相手との違いを許容し、共通な部分に着目することができて心が豊かである、ということになる。

この理論をこの神戸市の1万人アンケートを利用して確認できるように読み替えてみる。まず、「話す相手が1人しかいない人よりも話す相手が20人いる人」というのは「近所づきあいの多い人」という項目に読み替えることができるであろう。次に、「相手との違いを許容し、共通な部分に着目することができる」という部分は「近所における共通の利益である地域活動に積極的に参加する傾向がある」と読み替えることができる。

つまり、この調査における私の仮説は「近所づきあいの人数が少ない、または近所づきあいをしていない人よりも、近所づきあいの人数が多い人のほうが多くの社会圏に触れているので、より心が分化している。ゆえに近所づきあいの多い人（心が分化している人）は、共通の利益である地域活動に積極的に参加する傾向がある。また、地域で何か問題が起こったときに、自分だけに関係ないなどと考えず、みんなで何とかしようとする傾向がある」というものである。

この仮説が正しいことを確認するために、先ほど説明した「近所づきあいの多い少ないの度合いを示す質問項目」や「地域活動への積極参加傾向を示す質問項目」を選んだのである。つまり、前者を説明変数（独立変数）に、後者を従属変数にとって、その影響をクロス表を使って確認してみようと考えているのである。

3.2 問6について

では、説明変数である問6からみていきたい。この問6は実は(1)から(6)まで6つの質問項目があり、それぞれにおいて「近所づきあいの多い少ない」をはかることができ

るものである，しかしなぜ私がその中でも(1)(2)(5)のみを使い，(3)(4)(6)の質問項目を使わないのかというと，その3つのデータにあまりに偏りがあるからである．ちなみに(3)(4)(6)の質問内容は，(3)趣味やスポーツをいっしょにする人は，何人いますか(4)先月1ヶ月の間に一緒に出かけたり，買い物や食事などに行ったことのある人は，何人いますか(6)おすそわけをしたり，おみやげをあげたりもらったりする近所の人は，何人いますか 3つとも回答形式は問6(1)(2)(5)と同じ，である．この3つの質問項目において「とくにいない」と答える者，つまり「そういう近所づきあいはしていない」と答えている方がそれぞれ2000人以上もいたのである．この1万人アンケートにおいて有効回答の合計が約4000人なので，この2000人以上という数字はその半分を超える数字である．よって，残りの2000人のデータのみを使っても正確なデータが得られないと判断したため問6(3)(4)(6)は使わないこととした．

そして質問項目のリコードについて述べようと思う．問6(1)の場合，回答する人数が大体「0人から10人」の間に収まっていること，また行の数が5行を超えると表としてみにくくなること，により「0人，1~4人，5~9人，10人以上」という分け方をした．また，問6(2)(5)の場合は，回答する人数が大体「0人から6人」の間に収まっていることと，やはり行の数が5行を超えると表としてみにくくなることにより「0人，1~3人，4~6人，7人以上」という分け方をした．ちなみに，問6に関して(1)(2)(5)の場合すべてに「0人」を表に含めるのはなぜかということ，「その質問項目に関して，近所づきあいがとくにいない人」という意見も分析に含めなかったからである．

3.3 問14(4)とのクロス表

それでは問6(1)(2)(5)と問14(4)をクロスさせた表を分析していきたい．問14(4)は先ほど述べたように，地域活動への積極参加傾向を把握するための質問項目であるが，特に地域の人たちとの連帯意識をもっているかどうかを把握することのできる質問項目である．

まず，表2は問6(1)と問14(4)のクロス表である．また，図1は表2のクロス表を図に示したものである．

ちなみにこれからいくつか出てくる各クロス表の下には「カイ2乗検定の値，自由度，漸近有意率(両側)」をのせてあるが，これらはその検定の有意性を示すものである．そして表2~10はすべて有意性がある．

とれる。ただ、問6(1)において「5~9人」と答える者の割合が92.0%、「10人以上」と答える者の割合が91.8%と、逆転した結果が出ているのは残念であるが、それでも「0人」や「1~4人」と答える者においての割合と比較すると高い数値が出ているので、この逆転は許容範囲であるといえよう。

また、問14(4)の合計において、「みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う」が約3500人、「誰かがうまく解決してくれると思う」が約400人と合計の差がかなり開いているのは少し問題ではないかと思う。だが、こういったどちらが正解でもないような質問において、回答者は人によく見られたいといった意識から社会通念上良いと思われるほうにチェックをするものである。つまり、自分の考えとは違うほうにチェックをする場合があるということである。ゆえに、実際にはここまでの差はないと考えられる。また、もしこの調査において正確な値が得られたとしても、近所づきあいの人数が増えるにつれて「みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う」と答える者の割合も上がっていくという傾向は変わらないと考えられるので、この差も許容することにする。

次に表3・図2と表4・図3をみてる。

表3 問6(2)と問14(4)のクロス表

		問14(4)地域のみんながこままっていることがある時		合計	
		みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う	誰かがうまく解決してくれると思う		
問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんか	0人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	1321	182	1503
	1~3人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	87.9%	12.1%	100.0%
	4~6人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	993	111	1104
	7人以上	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	89.9%	10.1%	100.0%
	4~6人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	795	64	859
	7人以上	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	92.5%	7.5%	100.0%
	合計	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	483	40	523
		度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	92.4%	7.6%	100.0%
	合計	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	3592	397	3989
		度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいませんかの%	90.0%	10.0%	100.0%

カイ2乗検定の値 16.912 自由度 3 漸近有意確率(両側) 0.001

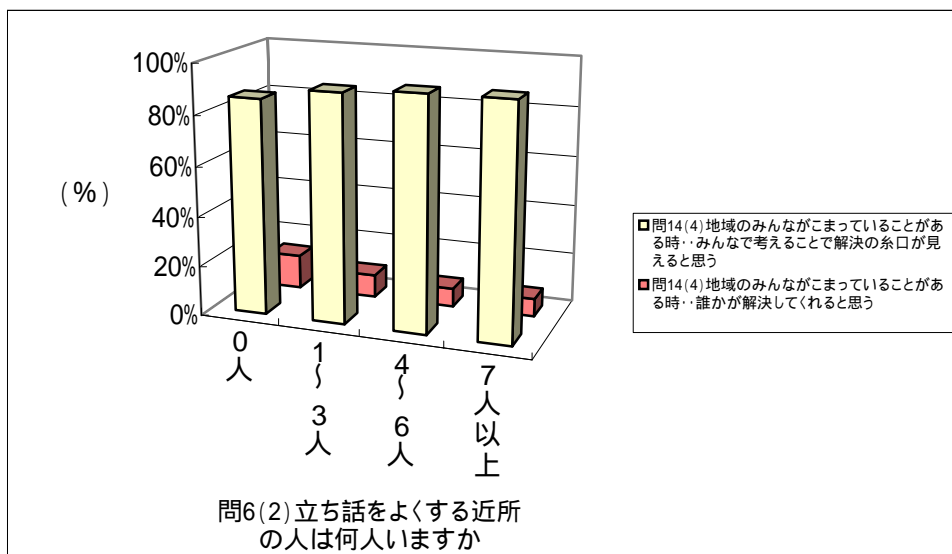


図2 問6(2)と問14(4)のクロス表の図例

表4 問6(5)と問14(4)のクロス表

加減表

	問14(4) 地域のみんながこまっていることがある時・		合計
	みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う	誰かがうまく解決してくれると思う	
問6(5) おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますか 0人	度数 943	151	1094
	86.2%	13.8%	100.0%
1~3人	度数 1632	165	1797
	90.8%	9.2%	100.0%
4~6人	度数 794	63	857
	92.6%	7.4%	100.0%
7人以上	度数 218	17	235
	92.8%	7.2%	100.0%
合計	度数 3587	396	3983
	90.1%	9.9%	100.0%

カイ2乗検定の値 27.718 自由度 3 漸近有意確率 (両側) 0.000

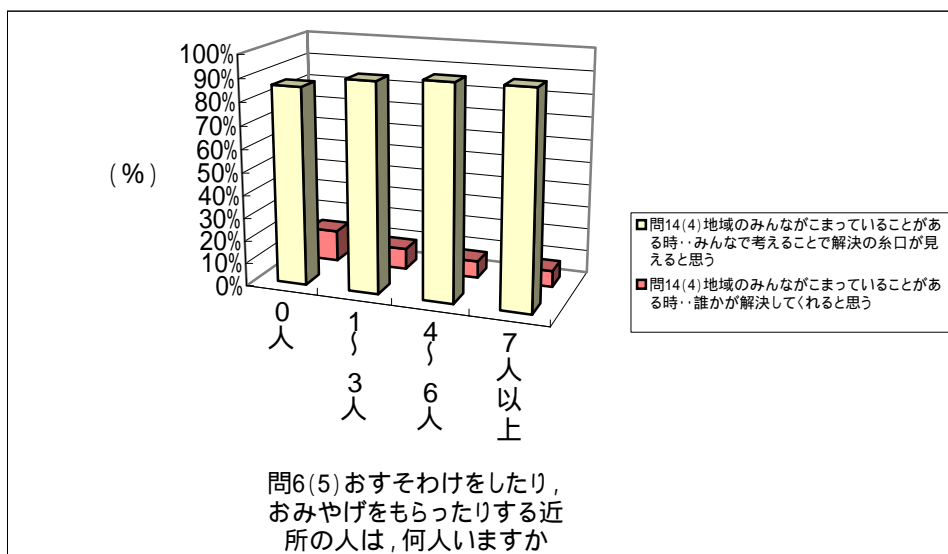


図3 問6(5)と問14(4)のクロス表の図例

表3・図2は問6(2)と問14(4)を、表4・図3は問6(5)と問14(4)をかけあわせたクロス表と図例である。これらからも、表2・図1の場合と同じく、近所づきあいの人数が多くなっていくにつれて問14(4)において「みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う」と答える者の割合が高くなっていくことが読み取れる。

ゆえに、表2・図1、表3・図2、表4・図3から近所づきあいの人数の多い人ほど地域の問題を他人任せにせず、みんなと協力してうまく解決していこうという、地域の人たちとの連帯意識が強くなるということが確認された。

しかもこの傾向は、表2においては近所づきあいの人数が「5~9人」と「10人以上」ではほぼ同じ割合であること、そして「1~4人」と「5~9人」における割合の差が離れていることより、また、表3においては近所づきあいの人数が「4~6人」と「7人以上」ではほぼ同じ割合であること、そして「1~3人」と「4~6人」における割合の差が離れていることより、近所づきあいの人数が5人という人数を境に分かれていることがみてとれる。ちなみに、なぜ「4人」ではなく「5人」を境にするのかというと、表2の「1~4人」と「5~9人」における割合の差(5.2%)のほうが表3の「1~3人」と「4~6人」における割合の差(2.6%)よりも大きいからである。つまり、近所づきあいの人数が5人以上の場合には、地域のことをみんなで解決していこうという考えを持つ割合が一段と高くなる、ということである。ここから予想できることは、近所づきあいの人数が4人以下の場合、つまり近所において触れ合っている社会圏の数が4つ以下の場合には、5つ以上の社会圏と触れ合っている場合に比べて、地域の人たちとの連帯意識に及ぼす影響は小さい

のではないかと、ということである。

3.4 問2(2)とのクロス表

次に表5・図4である。

表5 問6(1)と問2(2)のクロス表

加算表

			問2(2)地域での子供の見守りや青少年の健全育成の手助けをしている		合計
			よくしている & たまにしている	あまりしていない & していない	
問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますか	0人	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますかの%	76 11.9%	564 88.1%	640 100.0%
	1~4人	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますかの%	111 16.4%	566 83.6%	677 100.0%
	5~9人	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますかの%	181 19.9%	729 80.1%	910 100.0%
	10人以上	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますかの%	560 31.6%	1213 68.4%	1773 100.0%
合計	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますかの%	928 23.2%	3072 76.8%	4000 100.0%	

カイ2乗検定の値139.215 自由度3 漸近有意確率(両側)0.000

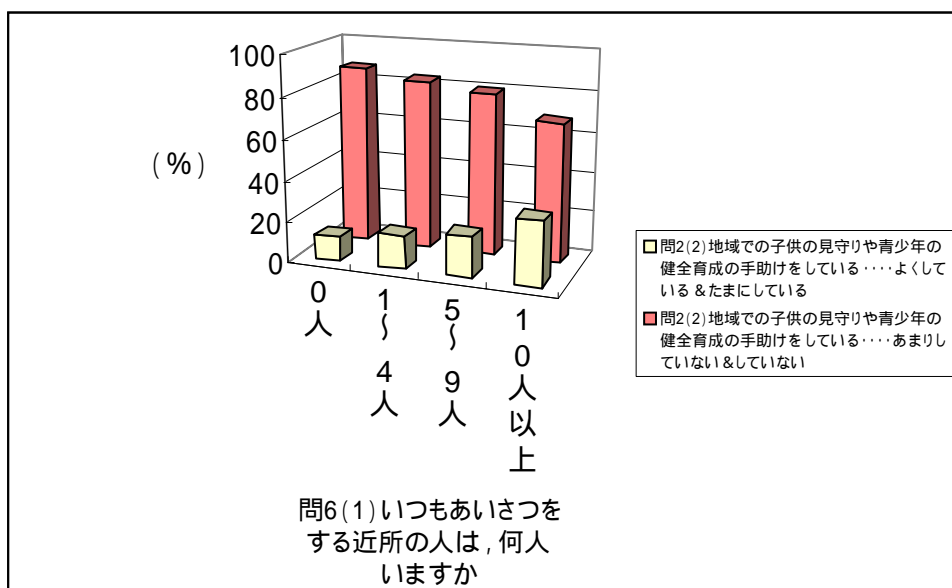


図4 問6(1)と問2(2)のクロス表の図例

これは問 6 (1) と問 2 (2) をクロスさせたものである . ここで問 2 (2) のリコードについて説明したい . 実際の回答形式は先ほど挙げたような『よくしている・たまにしている・あまりしていない・していない』のなかから 1 つを選択」という形式であるが , クロス表にしたときに行が 4 行 , 列も 4 列というのでは各マスの数値が小さくなり , 表として見にくくなるという理由により少し変更をした . その変更は「よくしている」と「たまにしている」を 1 つに , 「あまりしていない」と「していない」を 1 つにするという変更であるが , こうすることで今述べた欠点が解消されている .

表 5・図 4 をみてもみると , 近所づきあいが多い人ほど問 2 (2) において「よくしている & たまにしている」と答える者の割合が確実に増えていっていることが分かる . 表 6・図 5 や表 7・図 6 それぞれ問 6 (2) と問 2 (2) , 問 6 (5) と問 2 (2) をクロスさせたものである . からも表 5・図 4 の場合と同じ結果が , しかも表 5・図 4 の場合よりも顕著に出ている .

表6 問6(2)と問2(2)のクロス表

加減表

		問2(2)地域での子供の見守りや青少年の健全育成の手助けをしている		合計	
		よくしている & たまにしている	あまりしていない & していない		
問6(2)立ち話をよくする近所の人はいいますか	0人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいいますか の %	196 12.6%	1358 87.4%	1554 100.0%
	1~3人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいいますか の %	257 23.0%	862 77.0%	1119 100.0%
	4~6人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいいますか の %	267 31.2%	588 68.8%	855 100.0%
	7人以上	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいいますか の %	212 41.0%	305 59.0%	517 100.0%
合計		度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人はいいますか の %	932 23.0%	3113 77.0%	4045 100.0%

カイ2乗検定の値221.728 自由度3 漸近有意確率(両側)0.000

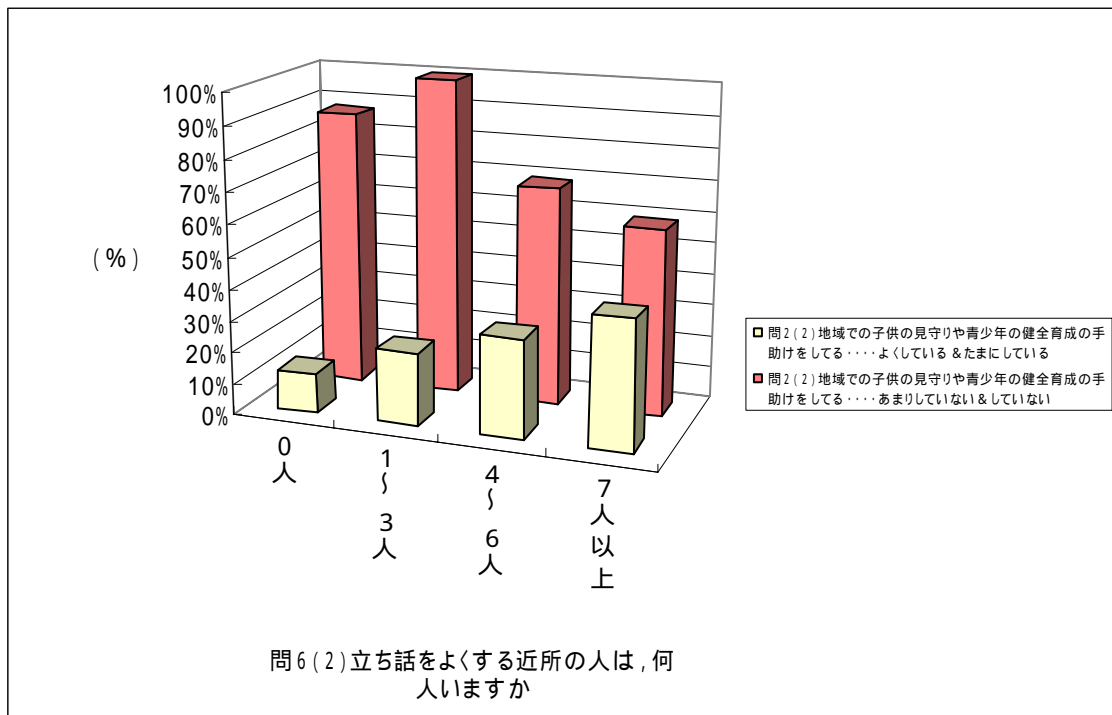


図5 問6(2)と問2(2)のクロス表の図例

表7 問6(5)と問2(2)のクロス表

加算表

			問2(2)地域での子供の見守りや青少年の健全育成の手助けをして		合計
			よくしている & たまにしている	あまりしていない & していない	
問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますか	0人	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますかの %	149 13.0%	994 87.0%	1143 100.0%
	1~3人	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますかの %	391 21.7%	1411 78.3%	1802 100.0%
	4~6人	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますかの %	281 32.5%	584 67.5%	865 100.0%
	7人以上	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますかの %	108 46.6%	124 53.4%	232 100.0%
合計	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますかの %	929 23.0%	3113 77.0%	4042 100.0%	

カイ 2 乗検定の値 182.502 自由度 3 漸近有意確率 (両側) 0.000

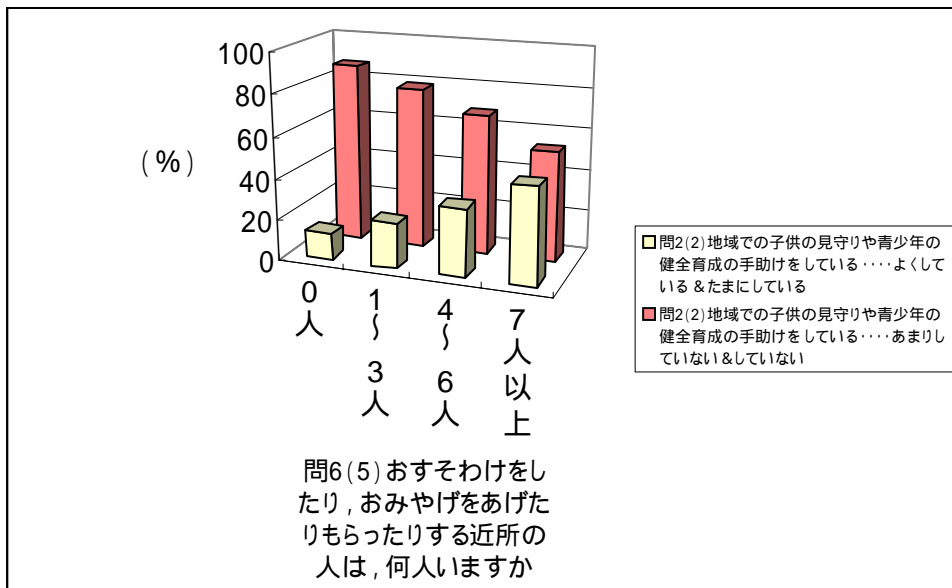


図6 問6(5)と問2(2)のクロス表の図例

ところで表5・図4, 表6・図5, 表7・図6すべてに共通して同じ結果が出ているということは喜ばしいことであるが, 問2(2)の合計においても「よくしている&たまにしている」と「あまりしていない&していない」がそれぞれ約900人と約3300人と差がある。しかし, 近所づきあいの人数に対する「割合」というものを考えたときにはしっかりと差が出ているので, この差も許容範囲と処理して分析することにしたい。

よってこれらの3つの表により, 近所づきあいの人数が多い人ほど地域の子供や青少年の育成に力を入れる, という地域活動への積極参加傾向が強くなるということが証明された。しかも, 表5・図4, 表6・図5, 表7・図6すべてにおいてこれだけはっきりと結果が出ているということは, この結果は正確に実情を表しているといえよう。

3.5 問2(3)とのクロス表

そして表8・図7についてである。

これらは問6(1)と問2(2)をクロスさせたものである。この問2(3)についてもリコードに際し問2(2)と同じ理由により, 同じ変更をした。

表8 問6(1)と問2(3)のクロス表

加表

			問2(3)自治会活動などの地域活動に参加している		合計
			よくしている&たまにしている	あまりしていない&していない	
問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますか	0人	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますか の %	115 17.7%	535 82.3%	650 100.0%
	1~4人	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますか の %	147 21.6%	532 78.4%	679 100.0%
	5~9人	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますか の %	318 34.6%	601 65.4%	919 100.0%
	10人以上	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますか の %	852 47.4%	944 52.6%	1796 100.0%
合計	度数 問6(1)いつもあいさつをする近所の人は、何人いますか の %	1432 35.4%	2612 64.6%	4044 100.0%	

カイ 2 乗検定の値 259.310 自由度 3 漸近有意確率 (両側) 0.000

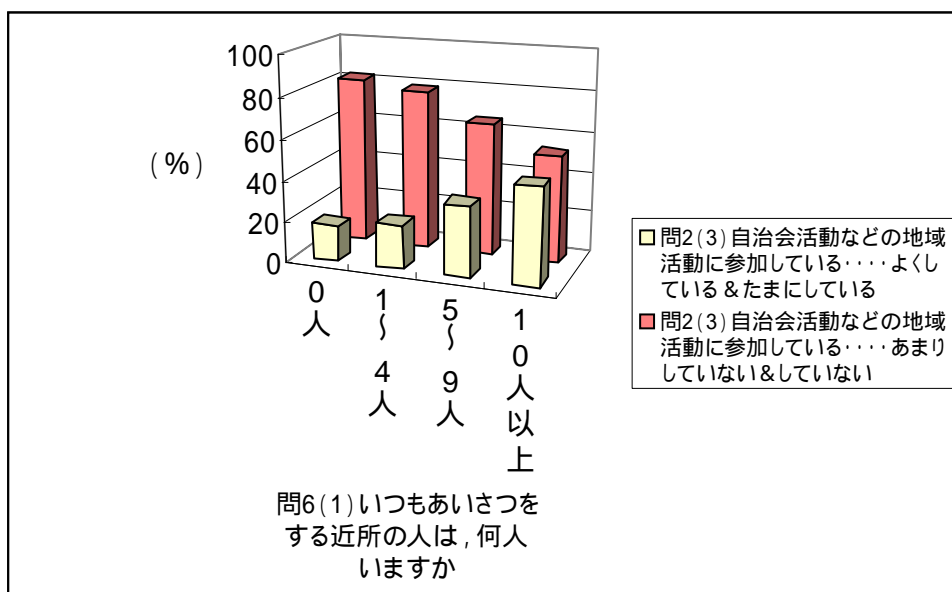


図7 問6(1)と問2(3)のクロス表の図例

表8・図7を見てみると、ここでも近所づきあいの人数が多くなるにつれ、問2(3)において「よくしている&たまにしている」を選択する者の割合が増えていっている。表9・図8や表10・図9 それぞれ問6(2)と問2(3), 問6(5)と問2(3)をクロスさせたものである からも表8・図7の場合と同じ結果が出ている。

表9 問6(2)と問2(3)のクロス表

加表

			問2(3)自治会活動などの地域活動に参加している		合計
			よくしている&たまにしている	あまりしていない&していない	
問6(2)立ち話をよくする近所の人は、何人いますか	0人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人は、何人いますかの%	303 19.3%	1264 80.7%	1567 100.0%
	1~3人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人は、何人いますかの%	425 37.7%	701 62.3%	1126 100.0%
	4~6人	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人は、何人いますかの%	407 46.8%	463 53.2%	870 100.0%
	7人以上	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人は、何人いますかの%	307 58.3%	220 41.7%	527 100.0%
合計	度数 問6(2)立ち話をよくする近所の人は、何人いますかの%	1442 35.3%	2648 64.7%	4090 100.0%	

カイ2乗検定の値349.779 自由度3 漸近有意確率(両側)0.000

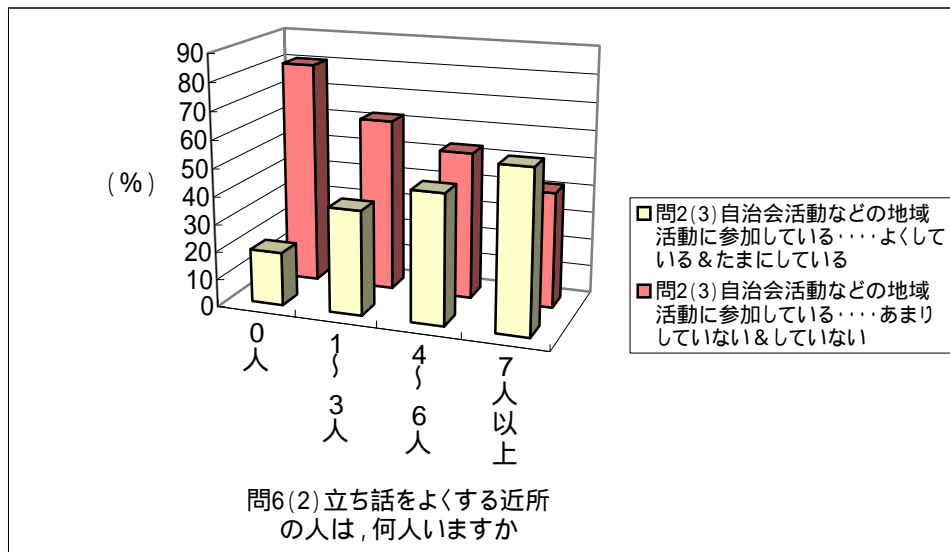


図8 問6(2)と問2(3)のクロス表の図例

表10 問6(5)と問2(3)のクロス表

加表

		問2(3)自治会活動などの地域活動に参加している		合計	
		よくしている&たまにしている	あまりしていない&していない		
問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますか	0人	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますか の %	232 20.1%	920 79.9%	1152 100.0%
	1~3人	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますか の %	627 34.4%	1198 65.6%	1825 100.0%
	4~6人	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますか の %	440 50.5%	431 49.5%	871 100.0%
	7人以上	度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますか の %	140 58.8%	98 41.2%	238 100.0%
合計		度数 問6(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする近所の人は、何人いますか の %	1439 35.2%	2647 64.8%	4086 100.0%

カイ 2 乗検定の値 自由度 3 漸近有意確率 (両側) 0.000

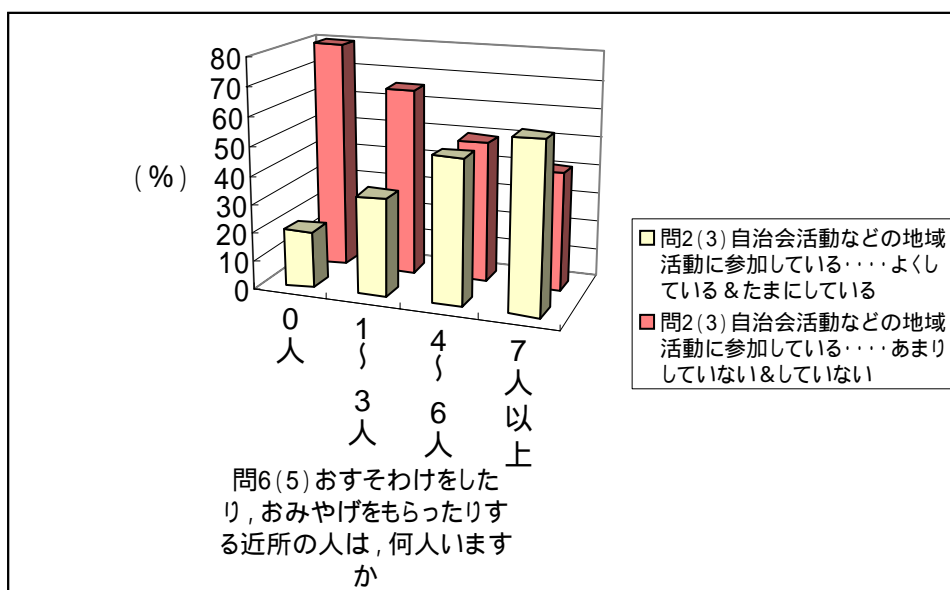


図9 問6(5)と問2(3)のクロス表の図例

しかも表5・図4, 表6・図5, 表7・図6の場合と違い, 問2(3)の「よくしている&たまにしている」と「あまりしていない&していない」の合計が, それぞれ約1400人と約2600人と, その差がより近づいているのも良い結果である.

よって表8・図7, 表9・図8, 表10・図9より近所づきあいの人数が多い人ほど自治会

活動などの地域活動に積極的に参加する傾向が強いことが証明された。また、この場合においても、表 5・図 4，表 6・図 5，表 7・図 6 の場合と同様に、かなりはっきりとした結果が出ているので、この結果もかなり実情を正確に表しているといえる。

3.6 調査のまとめ

以上の大きく分けて 3 つのデータ分析により、近所づきあいの人数が多い人ほど地域の人たちとの連帯意識が強くなり、地域活動に積極的に参加する傾向も強くなることがわかったので、先ほどの私の仮説が正しかった、ということが確認された。つまり、やはり近所づきあいの人数が多い人ほど複数の社会圏に触れているので、心が分化していて、近所の人たちとの間の共通の上位概念である「自分たちの住む地域を少しでもよくしよう」という考えを持つ傾向がある、ということが証明されたのである。

4 結論

4.1 まとめ

この卒業論文のテーマは「社会圏と心の変化」である。はじめにも述べたのだが、このテーマは要するに「自分と違う考え方をする人たちと、異質結合をすることで自分の考え方が変わっていくのではないか」ということである。また、これは同時に私の仮説でもあった。

私はこの仮説が正しいことを結局確認することができたのか。答えは、確認することができた、である。その過程を今からまとめてみたい。

まず、私はジンメル为社会圏から考察をはじめていった。人は多くの社会圏に所属し、さまざまな立場を持つことでよりその者の個性が発達する、つまり心が分化していく。そして心が分化することによって相手との違いを理解することができ、共通な部分を見ることが出来る。そして、より心の幅が広がって、心が豊かになれるということであった。

第1章の終わりでも述べたように、ジンメルのこの理論は私の仮説を裏付けるものであった。

次に、私は大谷のパーソナル・ネットワーク論の考察をおこなった。それにおいては、まず日本のパーソナル・ネットワークの特徴を述べ、属性別の影響を述べたりした。そして、ネットワークの異質性と脱通念度について述べた。ここで明らかになったことは、「異質結合している者に、通念にとらわれない意識を持つ者の比率が高い」ということである。これについてもその場で述べたとおり、私の仮説を裏付けるものであった。

最後に私は、実際のデータを使って、私の仮説（もはや仮説ではないが）が近所づきあいという狭い範囲においても成り立っているのか、を調査した。そして、この調査においても、「近所づきあいの人数が多いほど地域の人たちとの連帯意識が強くなり、地域活動に積極的に参加する傾向も強くなる」という、私の仮説と一致する結果を得ることができた。

これらの先行研究とデータ調査により、私の仮説は正しいということが確認されたのである。

4.2 最後に

この結果をふまえて、私が思うことを以下に示す。

私は、人間は基本的に同質結合を好む生き物なのではないか、と思う。それは、現代社会において、どの場面においても何らかの 差別 が存在することに表されていると思う。

差別 という言葉は、文字通り、異質なものを排除すること だからである。そしてそ

れは人がなるべく自分と異質なものを遠ざけ、同質的なものに囲まれて暮らすという、楽な生活に慣れてしまっているからこそ起こる行為なのであろう。そう、異質なものと向き合って、話をしあい、そしてお互いに認め合う、という行為は基本的に苦しい行為なのである。ただ、そういう苦しさを乗り越えて、相手を認めることができ、そしてジンメルのようにお互いの共通の利益を見つけ出すことができたなら、それは本当の意味で個人の豊かさ、ひいてはみんなの豊かさにつながるものだと私は思う。

私はこれからは自分と気の合う友人とだけ関わって、気の合わない人をなるべく避けて過ごす、という今までの（心の分化がストップするという意味で）もったいない生活から脱却していこうと思う。今までは、自分の考え方と同じような考え方をする人と集まり、同じような感情を共有しあい、その楽しさに満足していたが、これからは自分の考え方にはない価値観を持つ人とも存分にふれあい、今までの自分の狭い考えをどんどん新しくしていこうと思う。そうすることで私の心が分化して、自分とは違う相手の価値観を認めることができるようになり、私の心が豊かになるのだから。

この先、約 3 ヶ月後には就職することによって新しい世界が一気に広がるので、自分と気の合う仲間を探してそこに落ち着く、などということはずらずに、どんどん新しい価値観に出会い、それを吸収して心を分化させ、成長していこうと思う。

文献

Georg,Simmel,1890,Uber sociale Differenzierung,Sociologische und Psychologische Untersuchungen,Duncker&Humblot. (= 1970, 居安正訳『社会文化論』青木書店.)
大谷信介, 1995,『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク 北米都市理論の日本的解読』. ミネルヴァ書房

一頁あたりの字数・・・40字×30行

総ページ数・・・31ページ

400字詰め原稿用紙に換算した場合の枚数・・・51枚